

〈マルサス型結婚〉が 歴史事実であるとマズイか？

MacFarlane, *Marriage and Love in England.*
Conclusion Part Two

鈴木繁夫
名古屋大学国際言語文化研究科

合理的な人間と非合理の愛

- 「合理的な人間が結婚に踏み切るのは、ロマンチックな愛という制度化された非合理を選んだとき」。
- しかし非合理的な愛にも市場資本主義が浸透している。
 - 個人の選択、相手を所有すること、自分を高く売るものを手に入れる
- 資本主義未発達地域では家系を保つことが第一義で、経済的成功は第二義。
 - 資本主義が血縁を切り裂かれ、資産も親子のものではなくなる。→契約・法・国家が人間関係を支配。

歴史上のミスマッチ(1)

- 資本主義の勃興(15世紀後半-17世紀末)時期に、マルサス型結婚の方が誕生したわけではない。
 - (1)両性の同意が肝心で、親類・家族の同意ではない:12世紀キリスト教社会およびクヌートCanute法
 - (2)結婚はしたい人だけのもの:初期キリスト教
 - (3)精神と肉体のパートナー:キリスト教とゲルマンの思想

歴史上のミスマッチ(2)

- (4) 宮廷恋愛から結婚愛へ
 - 男女間の情熱的愛をテーマとする宮廷恋愛が11-12世紀に誕生する。
 - 愛が中心的美徳として賛美される。
 - 宮廷恋愛の起源はマニ教にある。
-
- 宮廷恋愛にみられる至高の愛は11-12世紀に誕生したのではない。
- 宮廷恋愛と結婚愛とは対立するものではない。
-
- 宮廷恋愛が結婚愛へとイングランドでは変容していった。ただしその変容要因は、15-16世紀に下層階級に見られた情熱的愛(宮廷恋愛?)が中上流階級へと浸透していった。

二つのバランス

- 社会と国家

- 社会(親類・家族)よりも国家(統治権力)や教区・組合(中間集団)が、個人の安全(資産・肉体)を保障できたのがイングランド。

- 互酬と市場

- 貨幣経済が浸透し、互酬から脱して市場が発達していた。

資本主義成立の必要条件

- 資本主義成立の必要条件として、マルサス型結婚(個人主義)があった。
- ではなぜマルサス型結婚が誕生したのか？
-
- 資本主義を促す三つの軸
 - (1)あきらかに個人の所有といえる私有財産概念
 - (2) 事象をすべて貨幣価値に還元する精神的構え
 - (3)賃金労働が普及していること
- 13-14世紀のイングランドには、これら(1)-(3)がすでに見られた。

ローマ法 対 ゲルマン法

- 12世紀はヨーロッパ全体が政治・経済・社会が似通っていた。
 - 【トレルチ:キリスト教共同体】
- しかし12-16世紀の間に、西ヨーロッパは新解釈のローマ法が支配するようになった。
- ところがイングランドはゲルマンの法制を利用し続けた。
- 例:
 - 所有権は、新ローマ法では所有している物(動産・不動産)に焦点をあてて考えられたが、イングランドでは対象を管理享受する際の権利義務や人間関係から議論された。
 - 土地所有に関しては、近隣者のための借地ではなく、自分の判断で相続分割できる土地であった。
-
- またカトリック教会ではなくイングランド土着の国教会の成立は、個人の判断と信仰の独立を確保した。

法から生じたイングランドの特質

- イングランドは、王が法の支配下にある立憲君主制であった。しかも常備軍、中央官僚機構、巨大宮廷もなかった。
 - John Fortescue, *Learned Commendation of the Politique Laws of England*, 1461
-
- 結果として、「敬神、商業、自由」の点で他国をぬきんでた存在となった。
 - Montesquieu. England had ‘progressed the farthest of all peoples of the world in three important things: in piety, in commerce, and in freedom’.

マルサス対マルクス

- マルサス：
 - 資本主義が発達し好況になれば人口が増加し、不況になれば人口が減少する。
 - 資本主義による不平等を捨てれば、戦争・飢饉による強制的な人口削減という不幸な事態が生じる。
 -
- マルクス・エンゲルス：
 - 資本主義による不平等を無くすべく、私有財産を撤廃する。
 - これにより人口が増加するとは思えない。→実際には中国のように増加する。